

仏教の幸福観を考える： 仏教辞典と若干の初期仏典を手がかりとして

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学教養教育リサーチセンター 公開日: 2023-03-24 キーワード: 作成者: 丸井, 浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2014

仏教の幸福観を考える

—仏教辞典と若干の初期仏典を手がかりとして—

丸井 浩

1. はじめに

仏教、特に初期仏教の思想が語られる場合には、「一切皆苦」や「四苦八苦」などの言葉が象徴するように、「苦」（ドウッカ）、つまり「思い通りにならない現実、実存のありよう」をありのままに受け止めることが、覚りの智慧に至るために、まずもって求められる要件として提示されるのが一般であり、「幸福」「幸せ」などという概念は、そもそもテーマ化されること自体、非常に少なかったのではないと思われる。しかし、仏典には「幸福」「幸せ」に相当する言葉がまったく登場しないわけではなく、仏教辞典類をたよりに「仏教の幸福観」の特質・分類について概略的な理解を得ることは可能である。また有名な二、三の初期仏典を垣間見るだけでも、該当する言葉にいくつも出会うことができる。このような初歩的な方法によって、「仏教の幸福観」の一端を伺い、ひいては、幸福観という切り口から仏教思想の哲学的な意義を、若干なりとも考察してみたい。

2. 仏教辞典から見る幸福概念

2.1. 幸福を意味する語——『広説佛教語大辞典 縮刷版』より

最初に、仏教の幸福観を探る上で基本的な問題点が二つあることを確認しておきたい。

第一に、中村元著『広説佛教語大辞典 縮刷版』（東京書籍、2010年、以下『広説』）によると、「幸福という語は漢訳仏典の中には見当たらないようである」（見出し語「幸福」とある。したがって、漢訳仏典に現れる「幸福」という語そのものを手がかりとして仏教の幸福観を考察する、という方法は用いることができない。

第二に、仏教の幸福観に関する先行研究は殆ど見当たらない。筆者の知る限り、仏教の幸福観をテーマとしたものとしては、吉田宏哲「〈基調講演〉仏教の幸福観」（『比較思想研究』37、2010年、pp. 1-7）があるのみであり、しかも講演録ということからか、もとづく典拠が示されていない。

とはいえ、上述の『広説』の見出し語「幸福」には、「幸福」に相当するに漢語として「楽・安楽」「利」「吉祥」が挙げられ、それぞれ対応するサンスクリット“sukha”“artha, hita”“maṅgala”が示され、最後にパーリ語として“sothhi”が典拠（『スッタニパータ』269）とともに挙げられている。そして「楽」「安楽」「利」「吉祥」がそれぞれ、『広説』において独立の見出し語として立てられ、適宜分類された意味のもとで若干の用例箇所が記されている。「安楽」という見出し語を例に挙げれば、意味が「①心の安らぎ」「②身体が快適なこと」「③快樂」「④安らか。好調なこと」「⑤安らかに」「⑥阿弥陀仏の極楽浄土の異名」と六分され、

それぞれの意味のもとに用例箇所が若干示される。そして用例箇所の典拠の多くは漢訳仏典であるが、必ずしも漢訳仏典に限定されているわけではなく、①では『唯識三十頌』（玄奘訳）の用例に対応するサンスクリット原典の語 *sukha* とそのチベット訳 *bde ba* まで出ているほか、『雑阿含経』の「清涼安楽」に対応するパーリ語経典『サンユッタ・ニカーヤ』中の *khema* が記されている。同様にして挙げられているサンスクリットは、③と⑤では *sukha*、④では *kalyāṇa* と *rata* である。

以上は「安楽」の場合であるが、「楽」という見出し語の場合は十三種もの意味に分類され、用例箇所が示されるテキストもかなり多岐にわたっており、なかには仏教の幸福観を考察する上で直接的にはあまり関係のないものも含まれている。なお「楽」については、あとで別の角度から詳しく取り上げる。「吉祥」は六種の意味に分けられているが、特に幸福と関係するのは「①めでたいこと。良好なこと」(*maṅgalatva, dhanya*) と「②安穩なる心のやすらぎ」で、①には『正法眼蔵』に現れる「吉祥」の用例まで載っている。他方、「利」は八つに意味が分類されているが、幸福に近いものと敢えて言いうるのは「②ためになること。……人のためをはかること」くらいではないかと思われる。つまり「(自分の) ためになること」は「(自分の) 幸福」にもつながり、「他者のためをはかること」は「他者の(、そして自分の) 幸福」にもつながるからである。なお「利益」という見出し語も『広説』に立てられ、「利」と意味は近いが、最後に「④仏の教えに従うことによって得られる幸福、恩恵」の意味が掲げられ、『選択本願念仏集』と『歎異抄』の該当箇所が示されている。

このほか「快樂」や「安穩」という見出し語も「幸福」と関係が深い。「快樂」は、「②物質的なたのしみ」と並んで、「①たのしみ。安楽。宗教的なたのしみを含めていう。宗教的な快樂は仏教でも承認している」と「④永遠のたのしみ。浄土のたのしみ」という意味説明がなされ、①には阿含経と大乘経典の用例箇所がいくつも出ている。「安穩」は「①やすらかに おだやかこと」「②安楽」「③最上の福祉」と分類されている。

2.2. 「楽」の分類と意味の広がり——二つの仏教辞典の項目説明より

以上、漢語仏典において現れる「幸福」に相当する主な漢語と、それらに対応する若干のサンスクリットとパーリ語を、『広説』に依拠して見てきた。なかでも「楽」は取り上げている用例箇所の数が相対的に多く、また意味分類も多岐にわたることから、ここであらためて「楽」に注目したい。なお以下、「(*…)」という形でカッコ内に記する内容は、引用者による補足である。

まず『広説』が掲げる十三種の意味の中で、幸福概念を考察する上で重要と思われるのは、「①安楽。楽しい」「②たのしい。ころよい」「④好ましい状態にあって身心が軽やかで安楽なること。たのしみ。快感」「⑤快感。身体の喜ばしい感受」「⑥五蘊の一つとしての受のこと(*特に楽受のこと)」「⑦快樂。性の快樂。官能の快樂」「⑧四顛倒の一つ(*苦なるものを楽と間違っと思ひ込むこと)」「⑨解脱の境地」の八種であろう。かなり微細な意味・用法の違いを考慮した上での意味分類であろうが、一見するだけでは、相互の意味の違いが必ずしも明白に理解できないところもある。

これに対して、中村元他編集『岩波 仏教辞典 第二版』（岩波書店、2002年）では、仏教用

語としての「楽」が三種類に分けて説明されており、仏教の幸福概念を大枠で捉えるのには適しているだろう。最初に「楽」の一般的な意味を「たのしい、こころよいことで、心身ともに安楽なことをいう。〈苦〉に対する語」と説明した上で、「仏教では楽について3種の理解がある」とし、対応するサンスクリットとして sukha を挙げる。その三種とは以下の通りである。

- 1) 人が対象と接したときに受ける感受作用で、楽受という。すなわち、快適な対象を感受して心身ともにこころよく受ける感受作用である。反対に、不快感をもたらし、苦痛を伴う感受作用を苦受といい、苦とも楽とも感じない感受作用を不苦不楽受、または捨受という。以上の三つの受を三受という。
- 2) 四顛倒（*四つの誤った捉え方）の一つ、苦を楽と見る（楽顛倒）をいう。……
- 3) 涅槃、さとり、解脱の境地をいう。（*一例として、『大乘涅槃經』巻14に出てくる無常偈「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂」をあげている。なお同偈は「作られたものはすべて無常である、生じては滅していくことを本性とする、生滅するものがなくなり、静まっていることが安らぎである」というほどの意味である。）

この岩波の仏教辞典の「楽」の概念整理はすっきりしており、また後に若干の初期仏典で確認するところであるが、特に初期仏教の幸福概念を探る上では非常に有効な分類と思われる。ただしアビダルマ仏教、さらには大乘仏教、密教で発達した楽概念が取り上げられていない。その欠を補うには、早鳥鏡正（監修）・高崎直道（編集代表）『仏教・インド思想辞典』（春秋社、1987）の「楽」の説明が有効であろう。以下では、その項目説明を筆者なりに分類した上で、注目すべき内容を整理しておく。

「楽」(sukha) ——

- (1) 感受作用としての楽。三受の中の楽受。「前五識（*眼識・耳識・鼻識・舌識・身識）に感ずる受は肉体的な受であるから身受といい、第六識（*意識）に感ずる受は精神的な受であるから心受というが、楽なる身受を楽受、楽なる心受を喜受ともいう。」
- (2) (*業の束縛からの解放の度合いと禪定の深まりの段階に応じて、安楽の質が転換してゆくことに関連して。) 善業が引き寄せる果報としての楽は、欲望に支配された欲界から色界・無色界での生へとレベルアップすると、もはや身受は含まれず、もっぱら心受となる。こうした禪定の深まりから涅槃へと上り詰めてゆくプロセスは、楽が質的転換を遂げる三段階（〈三楽〉）として示されるが、その際の三楽という分類には次の二種がある。〈三楽（その1）〉=①天楽（十善を修して天界に生まれて受ける楽）②禪楽（禪定に入って受ける楽）③涅槃楽（涅槃を究竟して得る楽）。〈三楽（その2）〉=①外楽（前五識より生ずる楽）②内楽（初禪ないし第三禪の意識より生ずる楽）③法楽楽（無漏智より生ずる覚りの楽を愛でる楽）。また禪定の深化の度合いを細分化した形の五楽という分類法もある。〈五楽〉=①出離楽（出家して苦を断ずる楽）②遠離楽（初禪において欲と悪不善の法を離れた状態）③寂靜楽（第二禪以上）④菩提楽 ⑤涅槃楽。

- (3) 『大乘涅槃經』の樂波羅蜜（涅槃にそなわる四徳波羅蜜の第二、完全な安穩性）。
- (4) 『理趣經』の大樂（mahāsukha）（密教が目指す究極の境地）。

この項目説明のみから一定の結論を導くことは不可能であるが、部派仏教（アビダルマ仏教）になると、精神統一の段階が進展してゆくプロセスの中に、世俗的な快樂とは質的に異なる「禪定樂」とも呼ぶべき、ポジティブな意味での樂概念が発達していったのではないか、という見通しが開かれる。そしてさらに大乘仏教が展開する中で、ポジティブ化された樂が、利他行の中でさらに新たな意味を帯びてゆく樂概念の進展を探る必要性が、浮上してくるようと思われる。

二、三の仏教辞典を頼りに仏教の幸福概念の諸相を一覧する試みへの補遺として、「幸福」に相当する代表的な三つの英単語 happiness、well-being、welfare に対して、梵英辞典が充てる主なサンスクリットを列挙する。

Monier Williams, English Sanskrit Dictionary —

[happiness] *sukham, ānandaḥ, dhanyatā, harṣaḥ, kalyāṇam, niḥśreyasam, kṣemah/kṣemam, svāsthyam, kuśalam, kauśalam, śubham, maṅgalam, bhādam, saubhāgyam, sampattiḥ, sampad, nirvṛtiḥ, śrī* など

[well-being] *kuśalam, kṣemam, susthitiḥ* など

[welfare] *kuśalam, kauśalam, kalyāṇam, kṣemam, śubham, bhādam* など

2.3. 仏教の幸福概念——仏教辞典から得られる情報のまとめ

- ・「幸福」という語は漢訳仏典には見当たらない。
- ・しかし、「幸福」「幸せ」「楽しい」などと訳しうるサンスクリットとパーリ語、ならびに、それら諸語（*sukha, svasti > sotthi, maṅgala, bhādra* など）に対応する漢訳語（樂、安樂、快樂、安穩、吉祥など）を考慮しつつ、仏教の幸福概念を探る上で最も情報が豊富な仏教辞典の見出し語は「樂」と思われる。
- ・特に『岩波 仏教辞典 第二版』の樂の3分類が目目される。すなわち、①人・対象と接して快適なものとして受ける感受作用としての樂（「樂受」）、②実際には「苦」であるものを、誤って真逆の「樂」であると勘違いする場合の樂（「樂顛倒」）、および、③涅槃、悟り、解脱の境地としての樂である。
- ・ただし仏教の多様性（アビダルマ・大乘仏教を含めた）を視野に収めた「樂」概念の解説としては『仏教・インド思想辞典』の「樂」の説明も重要である。善業と禪定の進展に応じて樂が深まり、涅槃樂において窮まるという、部派仏教で発達した「三樂」や「五樂」のほか、「樂波羅蜜」（『大乘涅槃經』）や「大樂（mahāsukha）」（密教の目指す究極の境地）など、大乘仏教において発達した樂概念も、仏教の幸福観を考察する上で見逃すことはできない。
- ・いずれにせよ、仏教辞典に依拠して、幸福に相当する語の意味と用法を整理することによって、ある程度、仏教の幸福概念を予備的に考察することは可能であることが明らかになった。

特に『広説』は、幸福に相当する意味を持つ、幾つもの漢語を見出し語として立て、適宜、意味分類を行い、それぞれ該当する用例箇所を、漢語仏典ばかりでなく、パーリ語仏典やサンスクリット原典に遡って示す場合が少なくなく、きわめて有益なツールとなることは間違いない。

・しかし仏教の幸福観を本格的に研究するためには、キーワードとなる語の用例を、現れるテキストごと、あるいは文脈ごとにきめ細かくマイクロ調査する必要がある。またそれと併行して仏教思想の展開というマクロな視点から、歴史的かつ哲学的に分析する作業も必須となるだろう。そのような本格的な研究を遂行することは現在の筆者には不可能である。以下では、さしあたり若干の初期仏典（の和訳）から、幸福観につながるような箇所を具体的に見て、内容を若干整理するにとどめ、最後に、筆者なりの問題意識を投げかけておきたい。

3. 初期仏典から見る幸福概念

3.1. 初期仏典に現れる幸福観を探るためのテキスト資料

主に参照する初期仏典は以下の二書である。

『ダンマパダ』(=Dhp) (中村元訳『真理のことば 感興のことば』岩波文庫、1978年；全26章、423詩句からなる)

『スッタニパータ』(=Sn) (中村元訳『ブツダのことば』岩波文庫ワイド版、1991年；全5章、72経、1149詩句からなる)

また Dhp と関係が深い『感興のことば』(Udānavarga) も若干参照する。

『感興のことば』(=Udv) (上記の『ダンマパダ』と同様；全33章)

これら三書の中村博士の和訳の中で、「幸福」「喜び」「快感」「楽しみ」などについて、ある程度まとまった形で述べている箇所を引用し、内容を整理して、そこに伺われる幸福観を考察する予備資料としたい。なお適宜、キーワードとなる訳語の原語 (Dhp と Sn はパーリ語、Udv はサンスクリット) を引用者によって「(*)」として補っている。

【A1】「釈尊の幸福論」(1)

これは Sn 第二の「四、こよなき幸せ」(Mahāmaṅgalasutta) (第258–269句) である。中村博士は当該の訳注 (p. 306) で次のように述べている。「私たちはどのように生きたらいいのか、ということを知ってほしいものが仏教であるが、では仏教は私たちにとって〈幸福〉とはどんなものだと教えているのであろうか。この短い一節は、〈人生の幸福とは何か〉をまとめて述べている。いわば釈尊の幸福論である。」

基本的には在俗信者に向けて、種々の善行を行い、功德を積み、理法にかなった行いをすれば、心安らかとなり、幸せになる、と説いている箇所のように思われる。

第 258 句「(* 神が釈尊に尋ねる——) 多くの神々と人間とは、幸福を望み、幸せ (* maṅgala) を思っています。最上の幸福 (* uttamam maṅgalam) を説いて下さい。」

第 259 句「諸々の愚者に親しまないで、諸々の賢者に親しみ、尊敬すべき人々を尊敬すること、——これがこよなき幸せである。」

第 260–268 句——「適当な場所に住み、あらかじめ功德を積んで、みずからは正しい誓願を起こしていること」「深い学識があり、技術を身につけ、身をつつしむことをよく学び、言葉がみごとであること (* 相手を恐れず、思っていることを率直に語ること)」「父母に仕えること、妻子を愛し護ること」「施与と、理法にかなった行いと、親族を愛し護ることと、非難を受けない行為」「悪をやめ、悪を離れ、飲酒をつつしみ、徳行をゆるがせにしないこと」「尊敬と謙遜と満足と感謝と (適切な) 時に教えを聞くこと」「耐え忍ぶこと、ことばのやさしいこと、諸々の〈道の人〉に会うこと、適切な時に理法についての教えを聞くこと」「修養と、清らかな行いと、聖なる真理を見ること、安らぎ (* nibbāna) を体得すること」「世俗のことがらに触れても、その人の心が動揺せず、憂いなく、汚れを離れ、安穩であること (* khema)」という善行、徳行を各詩句で掲げて、それぞれ末尾に「これがこよなき幸せである (* uttamam maṅgalam)」と結んでいる。

第 269 詩句「これらのことを行うならば、いかなることに関しても敗れることがない。あらゆることについて幸福 (sotthi) に達する。——これがかれらにとってこよなき幸せである。」

【A2】「釈尊の幸福論」(2) : Dhp 第 15 章「楽しみ」(Sukhavagga) (第 197–208 詩句)

第 197 句「怨みをいだいている人々にあって怨むこと無く、われらは大いに楽しく (* susukham) 生きよう。……」

第 199 句「貪っている人々のあいだにあって、患い無く、大いに楽しく生きよう。貪っている人々のあいだにあって、貪らないで暮らそう。」

第 200 句「われらは一物をも所有していない。大いに楽しく生きて行こう。……」

第 201 句「勝利から怨みが起る。敗れた人は苦しんで臥す。勝敗をすてて、やすらぎに帰した人 (* upasanta) は、安らかに臥す。」

第 202 句「愛欲にひとしい火は存在しない。ばくちに負けるとしても、憎悪にひとしい不運は存在しない。このかりそめの身 (* khandha 蘊、個人存在) にひとしい苦しみは存在しない。やすらぎ (* 『法句経』では「滅」、注釈で nibbāna) にまさる楽しみは存在しない (* natthi santiparam sukham)。」

第 204 句「健康は最高の利得であり、満足 (知足) は最上の宝であり、信頼は最高の知己であり、ニルヴァーナは最上の楽しみである。」

【A3】「釈尊の幸福論」(3) : UdV 第 26 章「安らぎ(ニルヴァーナ)」(Nirvāṇavarga) (31 句)

第 6 句「健康は最高の利得であり、満足 (知足) は最上の宝であり、……、ニルヴァーナは最上の楽しみである (* nirvāṇaparam sukham)。」 (= Dhp 第 204 句)

第12句「修行僧のこの船（*個人存在）から水（*誤った思考）を汲み出せ。水を汲み出したならば、船は軽やかになるであろう。情欲と怒りとを断ったならば、汝は安らぎ（* nirvāṇa）におもむくであろう。」（≡ Dhp 第369句「修行僧よ。……」）
 第31句「教えを説いて与えることはすべての贈与にまさり、教えを味わう楽しみ（* rati）はすべての楽しみにまさり、忍耐の力はすべての力にまさり、妄執をすべて滅ぼすことは（すべての）快樂（* sukha）にうち勝つ。」

【A4】 「釈尊の幸福論」(4) : Udv 第30章「楽しみ」(Sukhavarga) (53句)

第2句「他人を苦しめることによって自分の快樂（sukha）を求める人は、怨みの絆にまつわられて、苦しみから脱れることができない。」（= Dhp 第291句）

第3句「生きとし生ける者は安樂を求めている（* sukhakāmāni bhūtāni）。もしも暴力によって生きものを害するならば、その人は自己の安樂をもとめていても、実は安樂を得ることができない。」（= Dhp 第131句）

【B】 はかない欲楽・快樂（むなしい世俗的な幸福）⇔ 安らかな喜び、安らぎ

B.1. Dhp 第88句「賢者は欲楽（* kāmā）をすてて、無一物となり、心の汚れを去って、おのれを浄めよ。」

B.2. Dhp 第99句「人里離れた林は楽しい（* 喜ばしい ramaṇīya）。(*そこでは欲楽を満たすことは出来ないから）一般の人々は楽しまないところだが、貪欲（* rāga）を捨て去った人々は楽しむ（*√ ram）だろう。かれらは快樂（* kāmā）を求めないから。」

B.3. Dhp 第290句「つまらぬ快樂（* 少量の樂 mattāsukha）を捨てることによって、広大なる楽しみ（* vipulam sukham）を見ることができるのであるなら、心ある人は広大なる楽しみをのぞんで、つまらぬ快樂を捨てよ。」

第291句「他人を苦しめることによって自分の快樂を求める人は、怨みの絆にまつわられて、怨みから免れることができない。」（= Udv 第30章第2句）

B.4. Sn 第一「六、破滅」第98句「みずからは豊かで楽に暮らしているのに、年老いて衰えた母や父を養わない人がある、——これは破滅への門である。」

Sn 第1章「七、賤しい人」第124句「己は財豊かであるのに、年老いて衰えた母や父を養わない人、——かれは賤しい人であると知れ。」

B.5. Sn 第四「一、欲望」(Kāmasutta) 第766-767句の趣意：欲望（kāmā）をかなえたいと思う人は、もしもうまくゆくなれば心に喜びを覚えるが、望みが果たされなければ、悩み苦しむものだ。

第769-770句「ひとが、田畑・宅地・黄金・牛馬・奴婢・傭人・婦女・親族、その他いろいろの欲望を貪り求めると、無力のように見えるもの（諸々の煩惱）がかれにうち勝ち、危い災難がかれをふみにじる。それ故に苦しみがかれにつき従う。あたかも壊れた舟に水が侵入するように。」

第771句「それ故に、人は常によく気をつけて、諸々の欲望（kāmāni）を回避せ

よ。舟のたまり水を汲み出すように、それらの欲望を捨てさって、激しい流れを渡り、彼岸（*覚りの安らぎ、平安の境地）に到達せよ。」

Cf. Sn 第五「彼岸に至る道の章」より「十四、学生ウダヤの質問」第 1109 句「世人は歓喜（nandī）に束縛されている。……妄執（tanhā）を断ずることによって安らぎ（nibbāna 涅槃）があると言われる。」

【用例 B のまとめ】

自己中心的な幸せ → 追い求めてはならないもの、破滅に向かう

自己中心のはかない欲望から離れて安らかな境地を目指すべきである

【C】 善因楽果・悪因苦果（善行から生まれる幸せ）

C.1. Dhp 第 1 章

第 1 句「ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される。もしも汚れた心で話したり行ったりするならば、苦しみ（* duḥkha）はその人につき従う。—— 車をひく（牛の）足跡に車輪がついて行くように。」

第 2 句「ものごとは……心によってつくり出される。もしも清らかな心で話したり行ったりするならば、福楽（* sukha）はその人につき従う。—— 車をひく（牛の）足跡に車輪がついて行くように。」

第 16 句「善いこと（* puñña）をした人は、この世で喜び、来世でも喜び、ふたつのところで共に喜ぶ（* modati）。かれは、自分の行為が浄らかなのを見て、喜び、楽しむ。」

第 18 句「善いことをなす者は、この世で歓喜し、来世でも歓喜し、ふたつのところで共に歓喜する（* nandati）。「わたしは善いことをしました」といって歓喜し、幸あるところ（=天の世界）におもむいて、さらに喜ぶ。」

C.2. Dhp 第 35 句「心は、捉え難く、軽々とごわめき、欲するがままにおもむく。その心をおさめることは善いことである（* sādhu）。心をおさめたならば（*おさめられた心は）、安楽をもたらす（* cittaṃ dantaṃ sukhāvaham）。」

C.3. Dhp 第 9 章「悪」

第 116 句「善（* kalyāṇa）をなすのを急げ。悪（* pāpa）から心を退けよ。善をなすのにのろのろしたら、心は悪事をたのしむ（*√ ram）。」

第 117 句「人がもし悪いことをしたならば、それを繰り返すな。悪事を心がけるな。悪がつみ重なるのは苦しみである。」

第 118 句「人がもしも善いこと（* puñña）をしたならば、それを繰り返せ。善いことを心がけよ。善いことがつみ重なるのは楽しみ（*喜び sukha）である。」

第 119 句「まだ悪報が熟しないあいだは、悪人でも幸運（* bhadda）に遇うことがある。しかし悪報が熟したときには、悪人（* pāpa）はわざわい（* pāpa）に遇う。」

第 120 句「まだ善報が熟しないあいだは、善人（* bhadda）でもわざわいに遇うことがある。しかし善（* bhadda）の果報が熟したときには、善人（* bhadda）は

^{さいわい}
幸福 (* bhadra) に遇う。」

- C.4. 「もしも自分を愛しいものだと知るならば、自分を悪と結びつけてはならない。悪いことをする人は楽しみを得ることが容易ではないからである。」 (Saṃyutta-Nikāya 3.1.3)

【用例 C のまとめ】

善い行い (心の制御し／清らかな心／自己中心性の克服)

➡必ず (“おのずと”?) 幸せが訪れる

悪い行い ➡必ず (後で) 苦しみがふりかかる。

【D】 最上の安楽・安らぎ・涅槃 (nibbāna) (以下は既出の用例)

D.1. Dhp 第 202 句「……やすらぎ (* 『法句経』では「滅」、注釈で nibbāna) にまさる楽しみは存在しない (* natthi santiparam sukham)」

D.2. Dhp 第 204 句「健康は最高の利得であり、満足 (* 知足) は最上の宝であり、信頼は最高の知己であり、ニルヴァーナは最上の楽しみである (* nibbānam paramam sukham)。」 (* Udv 第 26 章「安らぎ (ニルヴァーナ)」第 6 句の対応句:「ニルヴァーナは最上の楽しみである (* nirvāṇaparamam sukham)」

D.3. Sn 第四「一、欲望」第 771 句「……舟のたまり水を汲み出すように、それらの欲望 (* kāmāni) を捨てさせて、激しい流れを渡り、彼岸 (* 覚りの安らぎ、平安の境地) に到達せよ。」

Cf. Sn 第五「一四、学生ウダヤの質問」第 1109 句「世人は歓喜 (* nandī) に束縛されている。……妄執を断ずることによって安らぎ (* nibbāna 涅槃) があると云われる。」

D.4. Dhp 第 290 句「つまらぬ快樂 (* 少量の樂 mattāsukha) を捨てることによって、広大な楽しみ (* vipulam sukham) を見ることができるのであるなら、心ある人は広大な楽しみをのぞんで、つまらぬ快樂を捨てよ。」

Cf. Sn. 「こよなき幸せの経」の「最上の幸福 (* uttamam maṅgalam)」

3.2. 初期仏典の用例のまとめ——初期仏教の幸福観の特徴を伺う

1. 近付きやすい数点の初期仏典 (Dhp, Sn, Udv) を、中村元博士の和訳に基づき、幸福観につながるとされる具体的なテキストの箇所を検討して、テキスト実証的な方法を基礎として、仏教 (初期仏教) の幸福観の探求への展望を図ろうとした。
2. 手始めに、中村博士が「釈尊の幸福論」と評される箇所 (Sn 第二の「四、こよなき幸せ」) からスタートした。そこには種々の善行・徳行を列挙する 11 句があり、いずれも「これがこよなき幸せ (* uttamam maṅgalam) である」という言葉で締め括られている。なおこの一連の「幸福論」は内容から判断して、基本的には在家信者に向けられた言葉である。
3. 一方、Dhp にも「幸福／幸い／楽」(sukha) が主題となっている一節 (第 197–208 句) があり、また、総じて Dhp と顕著な対応関係を示す Udv にはこの一節と内容的に

重なる第 26 章「安らぎ（ニルヴァーナ）」（31 句）がある。これらは修行僧（比丘）に向けて、煩惱（怨み、貪欲など）から解放された「涅槃こそが最上の楽である」（*nibbānaṃ paramaṃ sukhaṃ*）と説いている点が注目される。またこれとは別に Udv には第 30 章「楽しみ（Sukhavarga「安楽の節」）」もある。

4. したがってと初期仏典には、「幸福（楽）」とは何かを説く一連の教えが存在し、そして在家信者向けか、修行僧向けかによって、教えの内容に違いが認められると言えるだろう。

5. 特に注目すべきは、「楽」（*sukha*）を「つまらぬ快樂（*mattāsukha*）」（はかない世俗的な幸福（快感）」と「広大な楽しみ（*vipulaṃ sukhaṃ*）」とに二分し、「心ある人は広大な楽しみをのぞんで、つまらぬ快樂は捨てよ」と説く箇所であろう（Dhp 第 290 句）。

(1) 「つまらぬ快樂」に相当するものとしては、①「賢者」が「無一物となり、心の汚れを去って、おのれを浄める」際に、捨てるべき「欲樂（*kāma*）」（Dhp 第 88 句）、②「欲樂」を求める「一般の人々は」楽しめない「人里離れた林」でも「楽しむ」ことのできる「貪欲を捨て去った人々」ならば、求めることはない「快樂（*kāma*）」（Dhp 第 99 句）、③「他人を苦しめることによって」獲得される（Dhp 第 291 句）、あるいは「年老いて衰えた母や父を養わない」で自分だけで享受する、自己中心的な「快樂」（*attano sukhaṃ*）であり（Sn 第 98 句、第 124 句）、④そのような自己中心的な快樂を追い求めるのは「賤しい人である」と知るべきであり（Sn 第 124 句）、「怨みの絆にまつわられて（怨みから免れることはできない）」（Dhp 第 291 句）、「破滅への門」となる（Sn 第 98 句）。そして、⑤こうした「(世俗的な) 種々の欲望（*kāmāni*）」に囚われている限り、苦しみから逃れることができず、「あたかも壊れた船に水が侵入」して、激流を渡りきって向こう岸に達することができないように、「彼岸」（覚りの安らぎ、平安の境地、涅槃）に到ることができない。激流（輪廻生存）を渡り、彼岸／涅槃に到達するためには、「船のたまり水を汲み出すように」「それらの欲望を捨てさって」「(それらの欲望を追い求める) 妄執（*taṇhā*）」を断ずる」べきものである（Sn 第 771 句）。

(2) 他方、「広大な楽」とは、「涅槃（ニルヴァーナ）は最上の楽である」（Dhp 第 204 句義、Udv 第 26 章第 6 句）とされる「涅槃」をもって窮まる楽に相当するもので、「心ある人」は「つまらぬ快樂」を捨てて望むべき楽とされているので（Dhp 第 290 句）、「(自己中心的な) 快樂」、「(世俗的な) 種々の欲望」への囚われを離れ、「妄執」を断じて追い求めるべき最高次の楽ということになるだろう。

6. 以上の 2 種の「楽」の 5 (2) は、『岩波 仏教辞典 第二版』の「楽」の 3 分類の③に相当する。また 5 (1) の「楽」は①②を合わせた楽に対応づけることは可能であろうが、両者は分類の基準が異なると言えるかもしれない。

7. 本稿においては、若干の初期仏典の中村博士の和訳にもとづき、訳文中に現れる「幸福」「幸せ」「喜び」「楽しみ」「快樂」「福楽」「安らぎ」などという日本語に注目して、初期仏教の幸福概念、幸福観の考察に資すると思われる箇所を、適宜、ピックアップし

たにすぎない。できる限り、対応する原語をチェックするように心掛けたが、決して網羅的に資料を蒐集、分析したわけでもない。また同一の語を中村博士が訳し分けているケースは非常に多いが、本来であればその訳し分けの根拠を求めるべく、文脈や注釈での説明、さらには当該語の用例調査なども行うべきであろう。今後、初期仏教の幸福観が、原典ベースでの本格的な学術研究によって解明されることを期待してやまない。

4. 結びにかえて——仏教の幸福観と快樂主義

ところで、『岩波 仏教辞典 第二版』の「楽」の説明には見られず、冒頭に言及した吉田先生の講演録でも言及されていない重要な問題が、今回の調査によって改めて確認された。それは善悪の観念と幸・不幸（楽・苦）の問題との密接な関係性である。すなわち、「善因楽果 悪因苦果」という言葉で端的に示されているように、善い行い（puñña, kalyāna）をすれば必ず「福楽」（sukha）「喜び」（modati, sukha）「幸い」（bhadra）が当人に訪れ、悪い行い（pāpa）をすれば必ず当人に「苦しみ」（duḥkha）「わざわい」（pāpa）が降りかかる、という因果応報、業の法則である。またこの関係性は、「もしも自分を愛しいものだと知るならば、自分を悪と結びつけてはならない。悪いことをする人は楽しみを得ることが容易ではないからである。」（Saṃyutta-Nikāya 3.1.3）などとも表現されている。（3.1の【C】を参照）

勿論、これらの記述があるからといって、「善行とは当事者に必ず〈楽〉をもたらすものであり、悪行とは当事者に必ず〈苦〉をもたらすものである」とか、「〈楽〉を当事者に必ずもたらす行為は善行であり、〈苦〉を当事者に必ずもたらす行為は悪行である」などと、楽・苦という結果によって善・悪を定義している——と断ずることはできないだろう。しかしながら、自己中心的な煩惱に惑わされて、他者を傷つけてまでも自己の欲楽を実現しようという悪行を抑止するために、殺生という悪行は、一時的には行為者自らに何らかの楽をもたらすかもしれないとしても（この場合は「楽顛倒」であろうが）、結局は苦をもたらすことになるから、やめなさいという具合に、善悪を峻別する文脈において、苦楽という結果の有無に訴えようとする傾向が認められることも否定できないだろう。

仏教は快樂主義という思想に立脚しているとは到底思われない。むしろ快樂を目指す欲望に流されてはいけない、生まれ落ちたものは、数々の「苦」を逃れることはできず、死をもって生涯（当該の生）は終わるのであり、「一切皆苦」であるとの洞察のもとで、生存欲といういわば本能にあたるものからも解放されなければならないということを強調しているとすれば、快樂主義よりもむしろ禁欲主義に近いと言えるだろう。少なくとも、修行僧に向けた初期仏教の教えは「克己」の精神に貫かれているかのようである。

もっとも、快樂主義は結局、禁欲主義に行き着くとも言われるので、仏教の禁欲主義もまたその運命を辿った結果であると考えられる向きもあるかもしれない。しかし、いずれにせよ、仏教と快樂主義との関係については、今後、いろいろな角度から議論する意味が大いにあるように思われる。

またその議論とも深く関わる問題となるだろうが、善行の蓄積、あるいは禅定の深まりに応じて、体験される「楽」の質の転換がある、という考え方は、仏教の幸福観を探る上で、

必ずや考慮に入れておくべき重要なポイントになると思われる。

今回の考察においては、大乘仏教になってから浮上し、あるいは強調されるようになったであろう幸福観に言及することはできなかった。おそらく「楽」の質の転換に関しても、大乘仏教を特徴付ける新たな契機・要因が指摘しうるのではないかと愚考する。

最後に、仏教の幸福観のありかを、個人の幸せ追求の文脈に落とし込むことには危うさがあると筆者は考えていることを一言して、拙論を締め括る。

【付言】 本稿は、武蔵野大学仏教文化研究所と同大学「仏教・しあわせ」研究会の共同主催によるミニシンポジウム〈「仏教としあわせ」を考える〉(2022年2月18日オンライン開催)で、筆者が行った発表をまとめたものである。特に注記は付けなかったが、参照した書物と論文の書誌データは本論に記しておいた。